

館蔵品から⑥

安井曾太郎(1888-1955)

《静物》

1950(昭和25)年

油彩・キャンバス

高72,7×幅60,6cm

斜め上から描かれた果物と籐の椅子。絵のなかには水平の線がひとつもなく、垂直の線も背景の壁一部に限定されている。果物はまるで今にも盆からこぼれ落ちそうでありながら、辛うじてどまっているようにも見える。籐の椅子は現実にはありえないびつなかたちでうごめいている。未完成ではないかと疑いたくなるが、画面の左下には「S.Yasui」のサインがある。このサイン、実はスタ

ンプであり安井の直筆ではない。安井亡き後別の方が作品整理の際に押されたものらしい。だが、描きかけであるうがなかるうがこの絵には安井のエッセンスが十二分に詰まっている。わざと困難な視点から題材を捉えようとする挑戦的な姿勢。明度や濃度、彩度のバランスをとりながらそれらを大胆に変化させようとする軽快な筆さばき。安井様式の魅力は、この絵のとおり、ひとつバランスを崩すとすべてがダメになりそうなハラハラした感じにある。その危険さは、いかえれば「いつまでも見飽きない刺激に満ちた絵画」を生み出している。ちなみに、籐の椅子はどこかで見たことがあると思っていたが、来館者のお一人が「これは大原美術館にある安井の代表作《孫》の椅子と同じですよね」と教えてくださった。(Ty)

